【書評】 森本芳生著『「食育」批判序説 ～「朝ごはん」運動の虚妄をこえて、科学的食・生活教育へ』 明石書店・二〇〇九年

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>石原 みどり</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>156-164</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2011年2月28日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00002718">http://doi.org/10.14990/00002718</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
森本芳生著
朝の運動の虚妄をこえて、科学的食・生活教育へ
『食育批判序説』
田原みどり

この数年ですっきり定着した感

新しい食育の存在がある。すなわち新自由主義を打ち出した小
泉政権下の日本政府が「食育基本法」を制定し、平成七年六
月制定、七月施行、食育推進基本計画を立てて九つの項目に
ついて平成二二年度までの達成目標を定めた。以来、各自治体
に食育推進事業を進めるよう「半ば威圧的に」促してきた。

食育と学力調査の平均正答率との関係。家族全員で夕食を食べ
る頻度などの調査結果、各自治体、各地域での食育事業の進捗状
況などが報告されている。

『食育』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することが
できる人間を育てる食育。食育基本法・前文より抜粋と
いう理念はまっとうなことを述べている。しかしここに国家権
力が介在している点が注目点。『食育基本法』は「国家
総動員法」とも形容され（本書五三四頁、以下本書からの引
用は頁数のみ記す。学校教育現場では子どもに授業、国家愛
を刷込「心のノート」の同質性についての指導も見られ
る。」。心のノート」が心（脳）からの統制といえる。まさに
食育の基本法は身体（胃袋）からの統制といえる。まことに

156
朝は現実になったような話である。「茶色の朝」ならぬ栄養が滞っても機能する仕組みになっている。そうでなければ栄養が残っても機能する仕組みになっている。そうでなければ栄養が残っても機能する仕組みになっている。そうでなければ栄養が残っても機能する仕組みになっている。そうでなければ栄養が残っても機能する仕組みになっている。そうでなければ栄養が残っても機能する仕組みになっている。
続いて教育政策と教育現場に視点が移り、朝はんと成績アップが結びつけられるようになっていた社会的、政治的背景、結びつく具体的な現象、問題点が述べられる。八〇年代後半以降、企業、地域、親族等共同の中間体の崩壊でその教育的機能が失われ、家庭こそ教育の出発点であることが国家レベルで言われるようになる。著者は中教審の方針や答申などをとどめ、この点を検証する。さらに韓国、低負担、自己責任の制度を基本にした小泉内閣の発足が重なる。そのような状況下、学校を学力低下を招いた「とり教育」への批判を、「自己責任」を過度に追い求めた親からの成績アップ要請に対する学校側の目をつけたのち、「１０年計画」などの反省学習法、暗記学習法、暗記メソッドが「早すぎ早起き朝はん」注目すべきは、提出者・山本英男が「早すぎ早起き朝はんの課題」として朝が問題とするのは次の点である。

①朝はんと学力アップ
著者が問題とするのは次の点である。

①朝はんな学力アップ
は労的に結びついてはならない。②文言にかかわらず、テレビの影響力の大きさ、専門性、科学性を調べた説明、わかりやすく、朝はんや朝はんな信仰が生まれている。それが③文科省主導の国民運動として制度的フードファジーに発展している。そして朝はんな学力アップのための「手段」へと逆転している。さらに朝はんなが成績アップのための「手段」へと逆転している。④朝はんなに現在の教育が画一的なテスト主義に陥っている、という現象である。

最後にケトン体有に話が戻り、その研究の潮流が紹介される。血中増加はケトーシス（ケトン症）につながり、またケトン体が身体に有害とされる酸性物質であるため現代医学で問題視されるが、それは栄養素ケトーシスと飢餓性ケトーシスの違いを無視したものであるという。著者は、一九六〇年代アメリカにおいて始まるケトン体研究の学説と研究史を参考し、いまやケトン体悪玉説は覆され、むしろ治療的意義を持っているとする考えを賛同する。しかし日本では「常識」のために、その事実が確かめられることなく、医療現場でも患者の脳が飢餓状態に陥ればただちに糖質を摂取させる（もちろんその効果は確実に出るので誤りではない）という治療行為が続けられている。

第２章では科学的な食理論のあり方や流れが追究される。先行研究として公衆衛生学者豊川裕之の理論を中心にして取り上げ、それに著者の考えを加えながら、現代栄養学の知見を教育問題に適用することの無効性と非科学性を指摘する。そして本来の食理論のあり方を採るべく、近代食理学者の実践者の食理論の科学性と限界を検証する。まず、分子生物学者大瀧大が論じる想定主義の限界と階層階層構造を構成しているのだが、ある階層（たとえば遺伝}
子レベルについても元々方法で得られた事実は、直接別
かつ各階層が内に連関しながら食の世界を構成している。し
かも人間の食文化、社会性を考慮している。著者のいう科学
的な食理論とは、食の各階層のあり方と連関性に目配せしなが
ら、日常生活次元での実際の現象に即して論じることである。
現在の食育が根拠とする現代栄養学はどうか。確かに栄
養学内部でも階層原理は認識されており、同じことが唱えられ
ている。つまり『栄養素』で語るのではなく、『料理・食品』
衣のかけから、「栄養素」で栄養素を読むことをいうのが
適当であることで科学的でないと考えられる。

栄養素の限界が露呈している。

ここで再び大潮を参照され、『元に異なる階層では新
た
ては「石塚左玄の食養理論の脆弱性を、地理学・植物学生活に精通していた陸軍大佐・西端学の知見をもって補強構成しなおし、おおきく生活学的・風土論的文化論の視点から（食

論）として展開した（……）生命体における食の構造論を現在の実験と思想を観れば、西端学の生活学的視点は、石塚左玄の食養理論を大きく補強する。しかし、西端学の食物陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであり、日本食が火を用いるまでの人間の主食を切り離すのが前の十万年間も、多様な動物性食品を食べてきた実事を見逃してはならない。桜沢は隣居論に基づき「火による調理

で食物を陽性化することが必須」をするが、加熱調理は一面で栄養素の破壊を伴うのであ
かつて漫画家西原理恵子が「食育なんて、ホント、女をぼかして言葉書だと思う。（イイ）」という件。大抵、男が言っている言葉書だと思う。（エイ）。そこで、全然面倒みたかった。そりゃ決まるから無理ないよ。（イイ）。それが、きっともうつ子を怒ってしまいました。ちゃんと夜に落ち込む（イイ）。そんなことやって食育なんでは無視しましょうよ。（毎日新聞、ヨーロッパ軍節、7月9月の）と痛々しく。
また、本書には多岐にわたる問題やトピックが盛り込まれており、著者の視野の広さを感じる。いずれも個別の議論が必要な興味深いテーマであり、読者それぞれの立場と関心から読むことができる。たとえば第2章で再考される村井政彦評価在流されている美食家・食育家としての政彦イメージを一〇度覆すもので、社会的物議を醸しうそうである。あるいは、彼女が「親子団楽食う食卓」の助長（社会心理学者森本）ではないか、親に「お客様」の助長（社会心理学者森本）のとき治療的対応を求めるのは「お客様」の助長（社会心理学者森本）のことであり、と危惧する。これは評価にとっては直接ふりかれる問題でもあり、なおさらの場合論議が展開するのか注視した。

さて問題は、食育理論の根拠そのものが見事に論破された「食育白書」（平成二〇年六月）を見る限りならダメージを受けていた様子はなく、進行しているという事態である。したがって、食育に過ぎようが、あまりにも多勢に無勢であるからだ。「食育」推進派が退屈する背景として、まず、一日三食に飢えるこの生活（伝統食）を（たとえ実現できないとしても）盲目的に肯定するのは、「食育」の名をつなくもののとして、自分たちとスポンサー企業にとって利のある内容を取捨選択、あるいは構成して報道する巨大力をもった宣伝部隊がある。また経済的な側面も見逃せない。仮に多数の日本人が一日三食を一日二食にすれば消費量が減ればその分消費量は増える食育ビジネスは、まさに食育が一気に減り、経済的打撃は大きだろう。逆に「朝食抜き」が減ればその分消費量は増える食育ビジネスは、まさに食育が一気に減り、経済的打撃は大きだろう。
本書に打開策まで求めのは要求が高すぎよう。むしろ私が、そしてあなたが起こすことができるアクションを見つけて実行しなければならない。これは望ましいことといえる。全ての人間の責任である。著者は最後に、自分の主張が「時代があった、不毛な反対派のイデオロギーの持ち出しと映るかもしれない」場合、三頁と「茶色の朝」に続く発言をしているが、不毛で、どこではない。」「食育」と、一瞬弱気な発言をしているが、不毛のところで、はならない。「食育」など自分とは無縁だと思っている人も、すでに日々の食事を通じ、「食育イデオロギー」と関わっており、もしかすると、「国家総動員法」に加担しているかもしれない。「食育」を自分自身にふりかかう問題として、まず本書を手にとっている。我々の「朝ごはん」が日ごとに色が変わっていくことを意識しながら。

① 石塚は栄養学未発達の時代に食と心身の関係を論理化し、「体育・食育」は即ち食育なり」と述べた。石塚の理论は現在まで受け継がれており、その一つがマクロビオティックとしてアメリカで発展し、日本に逆輸入され、一定の支持を得ている。

② 各年度の「食育白書」は内閣府のウェブサイトにて公開されている。http://www8.cao.go.jp/syokuiku/index.html

③ これに関連した調べ、池上一之「食の共通体」（チャネリア出版、二〇〇八年）の、池上中一ほか「食の共同体」（チャネリア出版、二〇〇二年）の中に、茶色の朝の『茶色の朝』は、ある日突然、「茶色のベット以外は飼ってはいけない」という法律でできたことで起こる変化を描いた反ファシスムの寓話である（フラック・バロフ・藤本一勇訳、高橋哲哉、メソジ、大月書店、二〇〇三年）。

④ 強調

⑤ 眼が悪く、常にサイクリングする「朝ごはん」は、基調が「食育イデオロギー」ではないことを示唆する。著者は、朝ごはんの習慣化が生活規律や親子関係等全体のあり方の好転につながる可能性を認めている。しかしながら、朝ごはんが「野原」の必要十分条件ではない。

⑥ 朝ごはんの食事とは、「朝ごはん」の食事 hollandaleitungen.de と表現されているが、中程度の上昇を表す。中程度の上昇を表す 2ME ケニーサーと表現されているが、中程度の上昇を表す 2ME ケニーサーを表す。